

Title	複数の像を生きる若者たち : アフリカの「若者」研究の動向と新たな研究の視座
Author(s)	橋本, 栄莉
Citation	スワヒリ&アフリカ研究. 2018, 29, p. 1-17
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/69813">https://doi.org/10.18910/69813</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 複数の像を生きる若者たち

## — アフリカの「若者」研究の動向と新たな研究の視座 —

橋本 栄莉

### 0. はじめに

本特集の目的は、アフリカの紛争後社会に生きる多様な「若者」(youth)<sup>1)</sup>の実践を事例として、複数の若者観がせめぎ合うなかで、彼らがどのような戦略や対処に基づき、自らの人生や社会関係をつくりあげているのかを検討することにある。

近年、アフリカ諸社会において人口の大部分を占める若者世代への関心が高まっている。特に紛争後社会において、若者世代は暴力行為に加担した「問題」とみなされると同時に、地域再生のための「希望」としても語られている。

言うまでもなく、子ども／若者／大人といった世代の概念は、時代や地域によって異なる相対的なカテゴリーである(ミード 1989、ファン・ヘネップ 2012)。また、「子ども」や「若者」という区分自体も、西洋近代以降に形成されてきた歴史的社会的構築物であることが明らかにされている(アリエス 1980)。この点を踏まえれば、既存の若者という世代概念を前提として現象について語るのはもはや困難であるといえるだろう。

しかし、ここで無視しえないのは、歴史的社会的構築物であるところの「若者」たちには、彼らを実体として捉えようとする多数の勢力の期待や想像力が押し寄せており、これらの期待が地域的な世代概念との間に軋轢を生みつつも、彼らがその状況に対処し、時として利用・操作しているという現実である。

本特集のねらいの一つは、アフリカの「若者」を、年齢に基づいて区分される実体として捉えるのではなく、かつ単なる紛争の「犠牲者」や権力による統御の対象という一枚岩化されたカテゴリーとして捉える視点からも脱却し、複数の文化装置と歴史的想像力、そして個人と社会の思惑が交差し再生産されるアリーナとして捉え直すことである。

以下の節では、アフリカ社会における若者研究の動向およびアフリカ紛争後社会にお

---

<sup>1)</sup> 後述する通り、「若者」とは歴史的に構築されたカテゴリーであるため、本来ならば常に括弧付きで用いられなければならない語である。しかし、本論では猥雑性を避けるために、特定のニュアンスを帯びる場合を除き、同語は括弧を付けずに使用する。

いて若者が直面している状況の特徴をまとめたい。まず、既存の若者概念について検討した上で、若者研究の問題の所在を指摘する。そして、地域社会、国家、国際社会との関わりの中で若者を捉える視点がどのように推移してきたのかを既存の研究をもとにまとめる。そのうえで、現代アフリカの紛争後社会における「若者」をめぐる複数の想像力が若者たちに働きかけ、その想像力を基に彼らが自己成型する過程をいくつかの事例とともに論ずる。以上を通じて、本特集の研究の視座を提示し、最後にそれぞれの論者が今後のアフリカ若者研究に対して有する意義を説明する。

本論では、若者とは誰を指すのかを明確に定義することはせず、あくまでも地域社会や国家、国際関係の中で立ち上がる存在や言説としての「若者」を捉えることを試みる<sup>2)</sup>。次節以降で詳しく述べられるように、若者自体が関係的存在であるため、論者が定義を与えた途端にそれを規定している関係が覆い隠され、どこか現実とはずれたものになってしまうという可能性はある。統計学上では年齢に応じて「若者」が括られるようになったものの<sup>3)</sup>、地域社会における世代概念の特性を考慮すると、「子ども」や「大人」という区分は存在しても、我々が想定する「若者」と呼べるカテゴリーや語彙を対象社会において見出すことは難しい。

この背景を踏まえれば、本特集の論者が暫定的にはあるとしても、特定の人間集団を近代以降に成立した若者という概念を軸に議論を展開することにためらいがないわけではない<sup>4)</sup>。しかしながら、少なくとも、彼らを、自らの意思に基づき行動する「完全に自立した自由なアクター」や「過剰な犠牲者」(Durham 2000:114; Boothy and Knudson 2000)、あるいは白紙的存在タブラ・ラサ(ルソー2006)としてみなす勢力がある限り、それらの前提に基づく制度やシステムは、実際に彼らの人生に混乱や葛藤、期待を与え続けている。また本特集の多くの論者が描いているように、若者自身も、「若者」という語や概念を

---

<sup>2)</sup> 国際連合は「若者」概念の地域的多様性について言及したうえで、アフリカの「若者」を15歳から24歳までと定義している。一方、同じ国連機関であっても、国際連合人間居住計画(UN Habitat)の若者基金は、「若者」の定義を15歳から32歳までとしている。さらに、ユニセフや世界保健機構は、青年期(adolescent)を10歳から19歳、年少者(young people)を10歳から24歳、若者(youth)を15歳から24歳までとしている(United Nations 2013)。これらの例から、年齢を基準とする定義であっても、その対象範囲は機関や目的によって多様である。この範囲設定もまた、それぞれの主体が「若者」をまなざす視点と、それを受け継ぐ過程で生成されてきたことが窺える。この点については、今後検討すべき課題として残されている。

<sup>3)</sup> 2015年のアフリカにおける若者の人口は2億2600万人程度と推測されている(United Nations 2015)。

<sup>4)</sup> ただし本論が取り上げる「若者」の要素と特徴については、後述のダーラム(Durham)の指摘を参考にしている。

用いて表現することで、自らを様々な位相の社会の権力や権利、期待の中に位置づけ、既存の秩序や権力と距離を取りながら戦略的にふるまう局面があることも事実である。

したがって、アフリカにおける若者研究の概況を取り上げる本論では、若者という概念や集合を、年齢に基づく集団や実体としてではなく、関係や文脈によって特定の意味を与えられ、またその語が使用されることによって文脈や関係自体を作り出す指示的・関係的アクター (Durham 2000:116; 山岡 1993:154) として捉えたい。この概念は、メンバーシップがあいまいで流動的な集団である若者を捉えると同時に、この語に付随する複数の意味自体が生成する文脈や関係を捉えるために有効であると考えられる。

## 1. 構築論的アプローチの限界

若者についての議論を始める前に、そもそもアフリカにおいて、若者とは一体誰か／何を指すのかという大きな問いに向き合う必要がある。

「子ども」や「若者」といった世代をめぐるカテゴリーは、通過儀礼や年齢組織への加入、結婚や出産経験などを通じて判断されるものであることは、民族誌的研究によって明らかにされてきた。1960年には、アリエスによって、年齢に基づく人間の分類カテゴリーが近代以降の歴史の中で構築された／発見されたものでもあることが明らかにされた。アリエスは、中世の西欧社会において、既婚者と未婚者、土地・家を持つ者と持たない者というカテゴリーは存在しても、子供や若者、老人という年齢に基づく範疇はなく、それらの範疇が「妙な」集団の切り取り方であることを指摘している (アリエス 1980 : 8)。

しかし、アリエスの業績は、単に世代概念の虚構性や近代性を暴露したことのみにとどまらない。教育哲学者の広田は、アリエスの功績として、世代概念の歴史的構築性を解明しただけでなく、「子どもが何者であるか」という問いは、われわれが子どもをどう見、どう処遇し、どう語るかということともはや無関係ではありえないことを明らかにした点であると指摘した (広田 2004:342)。つまり、若者や子どもは特定の歴史的状況下で誕生した概念であるが、その概念に基づいてある対象をまなざし、語り、取り扱うアクターがいる限り、対象はまなざされるアクターによって構築され続ける。言い換えれば、その構築された概念もまた、その概念自体を文脈化し、あるいは固定化するアクターとなる。

アフリカ地域社会の世代概念は極めて多岐にわたり、これらを一つの問題のもとでま

とめあげることは当然のことながら不可能である。さまざまな文化装置の中で生成される世代概念を考慮すれば、既存の若者概念の構築性や歴史性は西洋社会の例をひかずとも「暴露」されるだろう。問題となるのは、世代概念の構築性の正しさとは無関係に、そのカテゴリーに付随する想定に基づいた制度やシステムがフィールドで展開しており、現実のさまざまな側面に働きかけているという点である。

アフリカ紛争後社会に生きる若者たちは、多様なアクターが前提とする若者観に翻弄されつつ、時として戦略的に、他者から与えられたイメージを生きている。言い換えれば、若者たちは、自分自身が分類されるカテゴリーの普遍性と相対性の中で、そのどちらにも対応しつつ、自らの人生を切り開いてゆく必要に迫られているのである。ただし、若者を創り上げている諸関係 ―親子・親族関係や地域社会、国家― や歴史的・社会的背景といった外延のみを捉えても若者自体を捉えることにはならない。この構築論の陥穽をどう乗り越えていくかということが、若者研究のかなめとなるのではないだろうか。

## 2. 多元的な「若者」概念

### 2.1. 地域社会における関係的存在としての「若者」

アフリカ地域社会において政治経済的・文化的周縁とみなされ、二次的な分析対象にしかならないことが多かった若者研究に大きく貢献したのは、人類学者による世代・世代集団の研究である。なかでも東アフリカ牧畜社会の民族誌的研究が明らかにしてきたのは、年齢組織への加入や親子間・世代間関係に基づく、関係的な「若者」のあり方である (e.g. Evans-Pritchard 1940; Spencer 1965)。他の社会と同様、アフリカの地域社会において、「若者」・「大人」・「子ども」といった世代のカテゴリーは、生物学的特徴や年齢を基準として区切られるものではなく、また固定的な集合体や人口統計上の集団を意味するものでもない (Aguilar 1997; Kurimoto and Simonse (eds.) 1998)。ある者が「大人」になり、あるいは「子ども」のままでいるかどうかは、通過儀礼の経験や、土地に対する権利の有無、配偶者や子供の有無などの基準に基づき社会の中で判断される。

東アフリカ諸社会では、発達した年齢組織 (年齢階梯制・年齢組体系) が報告され、これらの組織への加入を通じて西欧的な一方向的・不可逆的な絶対時間とは異なる時間概念・歴史観・世界観と社会秩序が構築されていることが議論されてきた (e.g. Baxter and Almagor (eds.) 1978; 田川 2005)。年齢組体系は、一つの民族集団にとどまるものではな

く、周辺の集団にも伝播し、似た社会構造や軍事組織が地域をまたいで存在し、トランス・ローカル、トランス・エスニックな連帯を築いていることも報告されている (Kurimoto and Simonse (eds.) 1998)。

年齢組織は、公的領域において、軍事組織としての政治的機能を有する集団である。一方、私的領域において、年齢組織への加入は家族・親族をめぐる問題、たとえば親子関係、男性－女性関係、年少者－年長者の振る舞いの規範に大きな影響を及ぼす。年齢組織は成員が未熟から成熟、老衰への人生をスムーズにたどるための装置であり、総合的な「人づくり」あるいは社会づくりのシステムでもある (田川 2016:28)。

上記の研究が明らかにしてきたのは、地域社会にみられる「世代」とは、生物学的特性や暦に基づく個人の年齢によって規定されるのではなく、むしろ文化的社会的システムのなかで関係的に形成されるという点である。しかし、この関係的・相対的な世代の範疇も、植民地支配に対する抵抗運動やその後の国内情勢、「近代化」への志向の中で画一化・固定的な集団として語られるようになる。

## 2.2. 国家権力と「若者」：地域を超えた活動と一枚岩化するイメージ

人口統計学においては、アフリカにおける若者の人口急増と紛争原因との相関関係が指摘されるようになった (e.g. Hendrixson 2004)。これらの研究では、アフリカの紛争多発が、若者が増えたことに起因することが指摘された。しかし、若者が急増している国家が必ずしも内戦状態にあるわけではない (Sommers 2010:321)。また、内戦状態にある国家においても、若者たちの急増と紛争への関与が、内戦の「原因」とするのはいささか性急な結論だと考えられる。統計学上の議論は、アフリカの紛争と若者の一局面しか捉えていない。この統計学的指摘を含め、若者を実体化・一枚岩化した存在として捉えようとする動きには、国家をはじめとする権力による干渉が関わっている。

「若者」への関心が高まったのは、多くのアフリカ諸国が紛争や内戦を経験した 1950 年代以降である。若者を単なる紛争の「原因」として捉えがちであった統計学的指摘に対して、変動する地域情勢と国家・国際社会からの圧力の中を生きる若者世代に焦点を当てた人類学的研究が増加した (e.g. Richards 1956; Blanch 1980; Honwana 1999; Boothy and Knudson 2000; Durham 2000, 2004; De Boeck 2005; De Boeck and Honwana (eds.) 2005)。これらの研究が描き出したのは、地域的多様性を持っていた世代概念が、国内外の軍事政治情勢とともにその質を変化させてゆく過程であった。紛争後社会を生きる若者たち

は、現代アフリカを特徴づける社会変容と相互作用の中心、あるいは危機と刷新の間で揺れる焦点の一つとみなされたのだった (De Boeck and Honwana (eds.) 2005:1-2)。

コマロフ夫妻は、近代の若者像を創造している権力の中心として、植民地統治期以降の国家の役割の重要性を指摘している (Comaroff and Comaroff 2006:273)。西欧列強の植民地支配から脱したアフリカ社会において、徐々に国家が人びとの生活に影響を与えるようになった。植民地支配に対する抵抗運動が行われていた時期には、地域社会の年齢組織は、植民地政府に対抗しうる軍事的勢力として新たな社会的役割を担うようになっていった (小馬 2001)<sup>5)</sup>。各地で内戦が発生した 1960 年代以降には、地域社会の多くの若者たちは、国家規模の紛争に動員され、また自ら進んで参与するようになった。このなかで、若者たちは地域・民族集団内での対立やその境界を越えて団結する動きを見せ始める。

ナイジェリアにおける「青年」問題<sup>6)</sup>に注目した望月は、独立後に政治的プロセスから排除された「青年」たちが、自身を独自に組織化し「青年」層が台頭してゆく過程を論じている (望月 2005)。脱植民地化過程において、「青年」は独立運動の中心となり重要な政治的役割を担った。しかし、独立後の政府を構成したのは、植民地権力と結びついた地域社会の有力者たちであり、また政治的混乱なかで「青年」たちは抑圧されるようになった (望月 2005:210-212)。

地域社会においても、年齢に相応しい社会的地位を与えられない「青年」たちのなかには、地域に滞留し、社会秩序に反発する者も現れた。その後さまざまな運動形態をもつ「青年」組織による政府に対する反抗や活動が行われ、時として活動は暴力化した。また相互に対立したり、過度に政治化したりする「青年」組織も現れた。国内の政治的混乱や経済停滞、選挙過程を経て、「青年」たちは暴力の主体や政治紛争の担い手として位置付けられるようになったのだった (望月 2005:216-220)。

アフリカ独立期前後の紛争や運動の主要なアクターとなった「若者」は、顔の見える個人というよりも、「問題」や「危険性」を想起させる集合的な表象としての側面を獲得していった。国家的な紛争の文脈において、「若者」とは、個人や特定の集団を指す

---

<sup>5)</sup> 一方で、第一次世界大戦後に衰退した年齢組織は、集団内外のレイディングにのみ従事するようになり、反社会的性格を担うようになったことも指摘されている (小馬 2001:411)。

<sup>6)</sup> 望月は英語の *youth* に相当する用語として「青年」を用いている。望月によれば、その実態として「青年」は「若者」でイメージされる年齢階層よりも高い人々を含んでおり、社会的には「成人 (adult)」としての認知を得ていないことから同語を採用したという (望月 2005:223)。

よりもむしろ、軍事組織の命令体系を確立し、軍事勢力の影響力を高めるために必要であった集団認識ないしカテゴリーであるといってもいいかもしれない。戦時中教育を十分に受ける機会を持てなかった若者たちは、技能や就職先もなく、社会経済的に脆弱な存在であり続けた。失業者の増加や暴力行為への加担、売春行為やドラッグの売買といった違法的商売に関わるようになった若者たちは、国家の「問題」として語られるようになる。紛争時にはその軍事力の中心を担っていたが、紛争後の混乱の中で、若者たちは国家において機能しない集団とみなされるようになったのだった (O'Brien 1996)。

国家や国際社会は、若者たちと暴力の関係性を利用すると同時に、物語ることで統御／救済の対象としての若者というイメージを再生産する主体となった。さらに固定的カテゴリーとしての「若者」の形成に影響を及ぼしたのは、アフリカを越えて世界的に流布していた「若者」をめぐる言説であろう。

この状況の中で若者たちは地域や国境を超えた若者同士のつながりを生み出し、新たな主体性を彼らが見出すようにもなった。この中で、地域社会と国家のはざまを生きてきた若者たちは、自分自身の新たな居場所とアイデンティティを見出してゆくこととなる。

次では、グローバル言説と連動する若者たちの新たな主体性について紹介し、本特集の視座を据える。

### 2.3. グローバル言説とトランスナショナルなアイデンティティ

1960年代以降、アフリカで若者がカテゴリーとして一枚岩化した背景には、アフリカの国家的情勢ならず、世界規模で様々なアクターが「若者」という集団を想像・ラベリングするようになったことが挙げられる。第一次世界大戦後の国際社会の動きの中で「若者」は、「失われた世代 (lost generation)」(Wohl 1979)として、世界的に社会的カテゴリーとしてこれまでにない「自治」を獲得するようになった (Comaroff and Comaroff 2006; O'Brien 1996)。

現代では、国際法やグローバル資本経済、開発援助、大宗教やポピュラー・カルチャーの流入など、世界規模で生じている社会変動は現代アフリカの「若者」のあり方に大きな影響を与えている。インターネットやテレビ、携帯電話の普及の中で、彼らは世界の若者の動向を知ると同時に、自らに与えられたイメージも知ることとなった。メディアのイメージのみならず、グローバル規模の若者言説は、開発プロジェクトや近代教育、



若者世代を対象とする国内外のマーケットを通じてもたらされる。この結果、若者たちの一部は、地域や国家を超えた言説や運動に積極的に参与するようになった。同時に、紛争後の不安定な政治経済情勢の中で周縁化された若者たちは、地域や国家を超えた若者像へとアクセスすることで、自らの行動の意味を読み替え、時として戦略的・策略的にふるまうようになった。

ニジェールのトゥアレグ (Tuareg) の男性が着用するヴェールやターバン (以下、ヴェールとのみ表記) に着目したラスムッセンは、若者たちが、国家的文脈、多民族集団間での文脈、グローバル的文脈などそれぞれの場面によって、ヴェールの意味を読みかえて対処しているという興味深い事例を報告している。ヴェールはトゥアレグの男性が文化的価値規範として重視する「慎み深さ」、「威厳」、「礼儀正しさ」などと深く関わるものである。また、ヴェールは男性の未婚／既婚および自身の子どもの結婚という、世代概念とも関係している。しかし、内戦を経て、ライフル銃やモーターサイクルといった新たな「男性の威信の象徴」が登場し、ヴェールの持つ意味合いも変化・多様化していった (Rasmussen 2010: 467-468)。ヴェールは、かつてのトゥアレグの男性の「高貴な純潔さ」というより、内戦後の地域自治に対する意識や伝統文化の保存、トゥアレグの多様な社会的起源を表すものになっていった。なかでも若い世代は、ヴェールを、外部世界に向けたニジェール内部の混沌の象徴としつつ、自分自身の出身民族のプライドを示し自己主張をする手段としても使用している (Rasmussen 2010:468)。

特に都市と村落部を行き来する若者やビジネスマンは、文脈や他者との関係に応じてヴェールを戦略的に着脱したり着用方法を変えたりすることで、その都度ヴェールの意味を操っていた。例えば、都市部のレストランで働く音楽家を例にとれば、普段聴衆の多くが都市の若者であれば彼らはヴェールを脱ぎ捨てジーンズや革製のジャンパーを着用しながら演奏するが、西欧の音楽プロモーターが来たときにはヴェールを「それらしく」かぶり、「神秘的な砂漠の音楽」を奏でる (Rasmusenn 2010: 472- 473)。

トゥアレグ男性のふるまいからみえてくるのは、若者たちは必ずしも、村落から都市へ、ローカルからグローバルへという一方向的な変化を経験しているわけではないことである (Rasmussen 2010: 473)。彼らは、いくつかの領域を行きつ戻りつしながら、その都度彼らが対峙する他者に、ヴェールがもたらす想像力を操作しながら対処している。ここで興味深いのは、ヴェールの着用者が想定する「意味」や「シンボル」と、読み手にとっての「意味」は、必ずしも一致しない点である。

アフリカの「若者」たちは固定的なカテゴリーとして語られるようになった一方で、自らそのカテゴリーに寄り添ったり、距離を置いたり、時として交渉しながら様々な状況に対処するようになった。彼らのふるまいは、必ずしも長期的な生存戦略と結びつくわけではない、場当たりの対処療法的なものかもしれないが、彼らの戦略は、紛争後社会において様々な勢力が抱えている社会にたいする想像力を同時に表すものでもある (Honwana 2006)。

この点で、紛争後社会を生きる若者たちは、「若者」という語や概念を軸とした組織や支援を通じて、トランスナショナルな空間に自らを位置づけると同時に、さまざまな秩序に自らの身をゆだねる「多中心的」(multi-centered) (Comaroff and Comaroff 2006) な生き方を選択しつつある。この状況の中で形成される若者たちのアイデンティティとは、一つのコミュニティにのみに所属しない、きわめてハイブリッドなものである<sup>7)</sup>。

### 3. 本特集の視座 — 複数の若者観の相克と共存を捉える

#### 3.1. まなざしとともに存在する「若者」

1980年代以降に盛んになった若者に焦点を当てた研究 (e.g. Blanch 1980; Durham 2000, 2004; Comaroff and Comaroff 2006; De Boeck and Honwana (eds.) 2005) において、論者たちは「若者」概念自体の使用に慎重であった。論者らは、地域社会の「若者」(あるいは大人—子ども関係)と、西洋近代が前提としてきた若者像の緊張関係を意識した上で、「若者」に定義と特性を与えていた<sup>8)</sup>。

例えば、ダーラムは、「若者」という分析概念について次の特性を挙げている。彼女によれば、「若者」とはまず、(1)親族を基盤とする家庭的領域とより広い公的空間をまたぐ存在であること、そして(2)ある程度自身の主体性を認識し、人びとに対して労働を指令するまでには至らない、依存的・従属的な社会的役割を負う者、さらに(3)あ

---

<sup>7)</sup> 一方で、若者の主体性を強調しすぎることもまた問題であろう。彼らの主体性は、あくまでも国家情勢や国際関係、地域社会の若者像に翻弄され、それぞれの領域と付き合いゆく中で生まれたいわば文脈的・状況依存的な主体性であり、その主体性もまた日々編成されているはずである。

<sup>8)</sup> アフリカ以外の研究においても、例えば日本の年齢組について研究する山岡 (1993) は、関係体 (relatum) としての若者という考え方を提示する。関係体とは「主体の置かれた状況(場) 連関が大であり、そうした主体は他者の関係(間柄)を包摂した形で存在している縁・ネットワーク」(山岡 1993 : 154) を意味する。

る社会領域で特定の行動を期待され、その行動がしばしば社会的なものと同反社会的なもの（時として生物学的）をまたぐ存在として概念化される（Durham 2000:116; Silverstain 1976、強調点は引用者による）。

強調点が示す通り、ダーラムが見出す「若者」とは、複数の領域をまたぎ、また支配者までにはいたらないがそれなりの役割を負う、社会的に中間的であいまいな存在である。この存在は、人類学者ターナーの言葉を借りれば、どちらの秩序にも所属しない、境界状態にあるとも表現できるだろう（ターナー1996）。ただし、現行の「若者」概念自体はすでに述べた通り近代以降に成立・成形されてきた概念でもある。ダーラムのゆるやかな定義に見出される若者の特性とは、特定の価値規範に基づき構築された中間性・境界状態にある。

また、若者に対して向けられるまなざし自体を「若者」の特徴とする論者もいる。例えば、コマロフ夫妻は、若者の特性として、過去の失敗と現在の恐怖、未来への展望、古めかしい期待や新しい周縁など同時に多くのものを意味することを指摘した（Comaroff and Comaroff 2006:268; De Boeck 2005）。同様の観点で、ブランチは、若者とは、歴史的に構築された、「神話的な極 — 理想と奇形、病理と万能薬 — を同時に意味しうるもの」と述べている（Blanch 1980:103）。“*Makers and Breakers*”という著作を編集したデ・ボエックとホンワナは、そのタイトル通り、アフリカの紛争後社会において社会を「構築する者」（Makers）であると同時に「破壊する者」（Breakers）である若者の特性を描き出した（De Boeck and Honwana (eds.) 2005）。

これらの見解が示すのは、若者そのものが実際に有している特徴というよりも、社会がどのように若者をまなざし、取り扱っているかという観点から抽出される若者像である。アフリカ社会の若者たちは、植民地期以来の様々な社会変容や国家の危機、グローバル言説と接する中で主体性を再構成しながら、「想像力の中心」（Durham 2000:114）となってきたのである。すなわち、社会が若者に対して見出す「意味」や想像力自体が、若者そのものを創り上げている側面が存在している。この点は、本論や本特集で取り上げたいくつかの事例において、若者たちが外部からの想像力に準拠しつつ自らを生成すると同時に、時としてそれを裏切ったり交わしたりしながら窮地を切り抜けていることからもうかがえる。

これまでの議論から、「若者」は、実体的なカテゴリーではないが、その語が生まれ、使用される中で実体であるかのように人びとや社会に働きかけるようになった歴史的

構築物・想像力であることが指摘できる。「若者」という語の使用は文脈依存的・関係的であるが、同時に、特定の状況とともにその語が語られることによって、さまざまな権利や期待、関係がその状況に関わるアクターの想像力とともに生みだされる。この意味で、「若者」とは、複数のアクターの文化装置の中で規定され、複数の期待や想像力とともに自己や集団を生成する「複雑なシニフィエ」(Blanch 1980:103)である。つまりこの「若者」という語・概念は、従来相対的であるはずの若者を普遍化し、まとめあげ、現実化ようとする力を持つ。この点で、若者やそれに付随する概念の運用は、ある歴史状況下にある社会の反映であると同時に、新たな歴史状況自体を生み出し、形作るものである。

### 3.2. 2つの境界状態と複数の秩序への「再統合」

ここで、「若者」と「紛争後社会」の二つの場面に注目することの意義について考えてみたい。この二つの領域に共通する特徴を挙げれば、それぞれが子供と大人、無秩序と秩序という境界的状态にあるという点である。この境界的状态について、先に挙げたターナーが論じた「分離」、「境界状態」、「再統合」の段階を当てはめるなら、通常境界状態は、従来の秩序へと再統合される方向に向かう。紛争後社会においても、紛争に関与していた、あるいは犠牲者となった若者たちを、従来の社会秩序へと統合する動きが高まる。ただし、この場合の再統合とは、地域社会における儀礼のように一定の秩序に「境界状態」が統合されることを意味するのではない。当の社会秩序とは、紛争を経てもはや従来のそれではなくなった。

そして、これまで述べてきただけでも、紛争後社会には、ローカル、ナショナル、グローバルな勢力 — もちろんこの3つの領域では括りきれない勢力もあるが — とそれぞれが理想とする「秩序」が存在する。この状況を言い換えれば、複数の「秩序」同士のせめぎ合いの中で、部分的・一時的に「再統合」されつつ、その中でまさに若者概念は構築されている。したがって、この中を生きる人間は、複数の勢力が想定する複数の秩序と向き合い、距離を取りながら対処する必要がある。

若者という存在と、紛争後社会という状況の2つの境界的状态において、彼らはどのようにさまざまな「再統合」の動きと向き合っているのだろうか。次では、さまざまな位相で彼らが抱える諸問題の特性と、彼らとその状況に対してどのような対処や主体性を見出しうるのかということに触れ、本論の視座を据えたい。

### 3.3. 紛争後社会の若者を困む状況と若者による応答

紛争状況は、地域社会の人々が行ってきた農耕や牧畜という生業活動に壊滅的な被害をもたらした。個人間や集団間の社会関係を築く際の重要な資源であった穀物や家畜、土地、そして儀礼的職能者や伝統的知識を失った地域は、「子ども」を「大人」にする手段も同時に失った。土地や家畜を失った多くの若い男性は、婚資を支払う能力を失い、結婚や家庭を築く時期を延長せざるを得なくなった。生業活動の破壊は、彼らがその活動や生産物を通して築いてきた社会関係をも同時に破壊することとなったのだ。また、戦後復興と「近代化」を目指す国家において、かつての通過儀礼は徐々に行われなくなるか、形骸化して意味を持たなくなった。地域社会における若者たちは、親族や結婚という私的領域においても、年齢組という公的領域においても、従来のような役割を果たすことが難しくなった。結婚・出産・土地や家畜の相続という、地域的な意味において「大人になる」ための方法や媒体を失った者たちは、「子ども」以上「大人」未満とも表現できる時期を長く過ごさざるを得ないようになったのである。

このような状況にいる若者たちの意志決定に大きな影響を与えるのは、若者たちを組み込んだ国家的政策である。若者が紛争後社会において国家の「問題」として語られるようになった一方で、「希望」や「可能性」としての側面も見出されている。若者を対象にした様々な国家政策やスローガン、プロジェクトが掲げられる中で、彼らは国家政策が彼らにもたらす経済的社会的利益と、地域社会からの圧力や、個人としてライフコースの選択のはざままで揺れ動くこととなる。

個々人の人生においてより重要な利益をもたらすのは、国際機関をはじめとする開発援助団体のプロジェクトである。若者たちの中には、西洋近代的概念としての「若者」、およびそれに付与されるイメージと想像力を駆使して、自らの人生を切り拓いてゆく者たちもいる。ただし、特に紛争による移動を経験した者の中には、教育を受け「近代的」な社会に生きる自己であると同時に、年齢組によって支えられる地域社会の若者であることを達成しようとする者たちもいる。

しかしながら、これらの支援やプロジェクトすべてが、若者が人生を立て直すのに十分に効果を発揮しているとは言い切れない。例えば、元子ども兵の地域社会への復帰について、子ども期や世代範疇の存在様式が異なる地域社会において、西洋社会が前提としてきた子ども像に由来する治療やケアは必ずしも効果的であるとは言えない。殺人にともなう霊的な穢れが発生すると考える社会は多い。殺人者の身体は、浄化されるま

では「穢れた」ものとみなされる。身体が「穢れた」ままの状態では、彼らがそもそもいた社会に復帰することは難しい。親族や祖霊、社会集団の網の目の中にある集合的な身体は、独立した個人の身体を前提とする西洋医学の手法で十分に「治療」をすることは困難である（Honwana 2006）<sup>9)</sup>。とはいえ、既存の「伝統的」浄化儀礼もまた、それまでの日常的な殺人事件とは異なる規模や文脈で生じた殺人に対してどれだけその「効果」を発揮するのかは不明である。儀礼に読みこまれる「意味」もまた、実践者や参与者それぞれの視点によって異なるだろう。紛争経験の記憶の取り扱いや紛争によってもたらされた社会関係の「回復」は、常にグレーゾーンで行われ、その効果が判断されなければならない状況にある。

以上見てきた通り、「若者」をめぐるローカル、ナショナル、グローバルな言説や実践は、独立しているものではなく、相互に影響しあいながら互いを成立させている。複数の領域を行き来するなかで若者たちが新たに形成する連帯と共同性は、同時に、地域社会においては疎外感や劣等感を生み出す可能性を秘めている。本特集の論者が着目するのは、いずれも、複数の領域をまたぎ、その中で様々な勢力と関わり、対処・応答しようとする若者たちの姿であり、結果として出来上がった実践、知、組織、人間関係などである。

アフリカの紛争後社会を生きる若者たちは、自らに寄せられる外部からのまなざしや想像力を意識し、時にそれらを利用しつつ、自らの人生や生きるコミュニティを（再）構築しようとしている。この状況の中で彼らが意識したまなざしは再生産され、次世代へと受け継がれるだろう。このように、彼ら自身が自分たちを「意味ある」方法で区切り、再帰的に生成される自己や「若者」という語の用法の中に、新たな「アフリカの若者」の姿を見出すことはできないだろうか<sup>10)</sup>。

---

<sup>9)</sup> 紛争後社会における「社会的弱者」（初瀬他(編)2015)としての「元子ども兵」に対する支援とケアの現場は、西洋近代的な若者観や子ども概念と、現地社会の大人／子ども概念に基づく責任や義務の発生とがせめぎ合う場となっている。「子ども兵」らは強制連行によってそれまでのアイデンティティを剥奪されただけでなく、その後軍隊の中で与えられたアイデンティティにそって自ら積極的に意味づけを行っていった。この状況を受け、のちに「子ども兵」の処遇に関与する者たちの間では、彼らが国家的紛争の犠牲者であるか、加害者であるかという点が論争の焦点となる。彼らの主体性は、軍隊による搾取の対象となり、それゆえ「救済」の対象となる中で、その所在は曖昧なものとなっていった（Durham 2000:117; Honwana 2006）。

<sup>10)</sup> 本特集号の特質上、本論で取り上げた若者の動向に関する研究については、特に1950年代以降は国家規模の紛争と若者のかかわりを取り上げた。紛争後社会以外のアフリカの「若者」の動態については今後の課題とする。

#### 4. 本特集の構成

ここで、本特集が取り上げる各論を紹介したい。本特集は本論以外に4つの事例を中心とする論文によって構成される。

岡野論文が取り上げるのは、1990年代に内戦を経験したシエラレオネにおいて、国際社会が前提とする「近代的若者観」を軸に行われた平和構築事業をもとに成り上がっていった「開発事業エリート」と呼ばれる若者たちである。なかでも岡野は、バイクタクシー業を事例として、国際社会の想像する若者観を用いて十年ほどの間に「開発事業エリート」たちが成り上がっていったプロセスを記述する。

近藤論文が取り上げるのは、1990年代に深刻な紛争と虐殺を経験したルワンダの農村部に暮らす未婚の女性たちの、女性兵士として働くことに対する希望と葛藤である。内戦後のルワンダでは、「よきルワンダ人」という理想的な国民の姿が政府によって提唱され、女性にまつわる国家政策では「つよい女性」の躍進が促されている。近藤は、彼女たちの選択が、彼女たちを取り巻くいかなる社会的な環境下で見出され、親密な者とのあいだでどのような交渉や調整を経てなされてきたのかを考察する。

川口論文が取り上げるのは、北部ウガンダ紛争後を生きる「元子ども兵」の日常と、彼らが抱える苦悩である。「元子ども兵」を含む地域社会の人々が経験している日常には、被害者／加害者という枠組みでは括りきれない状況が存在している。「子ども兵」となった者たちを「見捨てた」者たちの「罪悪感」など、周囲の人間も複雑な感情を持ち合わせている。この中で川口は、過去の戦場経験の単なる「克服」ではないかたちで「納得」を導き出そうとする「元子ども兵」の姿を浮き彫りにする。

村橋論文が取り上げるのは、南スーダンで生じた武力紛争からウガンダやケニアに逃れてきた難民たちの活動である。難民となった若者たちは、教育を通して「豊かな」生活を手に入れようとすると同時に、故郷の社会的価値観やライフスタイルを保持しようとする。村橋は、ロピット人難民の「コミュニティ活動」に着目することで、「故郷」と「難民」を揺れ動く若者たちの動態を描き出す。

本特集号の各論者が観察・収集した若者たちの実践や語りには、紛争の「加害者」でも「被害者」でもなく、かつ完全に自立した戦略的な主体としても括りきれないような「若者」をめぐる状況を見出すことができる。これらの事例の検討を通じて、本特集ではアフリカ紛争後社会に生きる若者の多様性を捉えると同時に、紛争後社会において形成される新たな「秩序」やコミュニティ、その中で形成されるハイブリッドなアイデン

ティティを捉えることを目指す。この試みは、単に個人のヴィジョンやミクロな社会関係を捉えることというよりも、そのミクロな関係の中に埋め込まれた複数の「世代」、「歴史」、「時間」の観念のせめぎ合いについて再考することにもつながるのではないだろうか。

## 謝 辞

本特集号の論文は、2016年10月に京都大学にて開催したトヨタ財団ワークショップ「アフリカ紛争後社会と〈若者〉」（日本アフリカ学会関西支部と共催）における発表に基づき執筆されている。同ワークショップの開催は、トヨタ財団研究助成（研究課題番号：D13-R-0685、「独立後南スーダンにおける若者組合の「再編」と多様性の中で育まれる「共同性」に関する人類学的研究—若者のヴィジョン構築と地域社会の再建にむけて」、研究代表者：橋本栄莉）と日本アフリカ学会の支援によって可能となった。同ワークショップでコメンテーターを務めて頂いた京都大学の中村香子先生、慶應義塾大学の佐川徹先生、匿名の査読者となってくださった先生方をはじめ、関係者の皆様に厚くお礼申し上げたい。

## 参考文献

- アリエス, P. 1980. 『〈子供〉の誕生：アンシエン・レジーム期の子供と家族生活』 杉山光信, 杉山恵美子訳, みすず書房.
- 初瀬龍平, 松田哲, 戸田真紀子. (編) 2015. 『国際関係のなかの子どもたち』 晃洋書房.
- 広田照幸. 2004. 『教育言説の歴史社会学』 名古屋大学出版会.
- 小馬徹. 2001. 「イニシエーションの現在とアイデンティティ」 和田正平 (編) 『現代アフリカの民族関係』 pp. 406-438, 明石書店.
- ルソー, J. J. 2006. 『エミール (上) (下)』 今野一雄訳, 岩波書店.
- ミード, M. 1989. 『サモアの思春期』 畑中幸子・山本真鳥訳, 蒼樹書房.
- 望月克哉. 2005. 「アフリカにおける住民紛争と「青年」問題 — ナイジェリアの事例を中心に」 篠田英朗・上杉勇司 (編) 『紛争と人間の安全保障：新しい平和構築アプローチを求めて』 国際書院.



- 田川玄. 2005. 「民俗の時間から近代国家の空間へ — オロモ系ボラナ社会におけるガダ体系の時間と空間の変容」 福井勝義 (編) 『社会化される生態資源 — エチオピア絶え間なき再生』 pp.295-322、京都大学出版会.
- 田川玄. 2016. 「老いの祝福 南部エチオピアの牧畜民ボラナ社会の年齢体系」 田川玄, 慶田勝彦, 花淵馨也 (編) 『アフリカの老人 — 老いの制度と力をめぐる民族誌』九州大学出版会.
- ターナー, V. M. 1996. 『儀礼の過程』 富倉光雄訳、新思索社.
- ファン・ヘネップ, A. 2012. 『通過儀礼』 綾部恒雄・綾部裕子訳、岩波文庫.
- 山岡健. 1993. 『年齢階梯制の研究 — 「若者組」を中心として』 北樹出版.
- Aguilar, Mario. I. (ed.) 1997. *The Politics of Age and Gerontocracy in Africa: Ethnographies of the Past and Memories of the Present*. Trenton, Africa World Press.
- Baxter, Paul. T. W., and Almagor, Uri. 1978. *Age, Generation and Time. Some Features of East African Age Organizations*. New York, St. Martin's Press.
- Blanch, Michael. 1980. Imperialism, Nationalism and Organized Youth. In Clark, J., Critcher, C. and R. Johnson (eds.) *Working Class Culture: Studies in History and Theory*, pp.116-120, New York, St. Martin's Press.
- Boothby, Neil. G., and Knudsen, Christine. M. 2000. Children of the Gun. *Scientific American* 282(6), 60-65.
- Comaroff, Jean., and Comaroff, Jhon. 2006. Reflections on Youth, from the Past to the Postcolony. In Fisher, M. and G. Downey (eds.) *Frontiers of Capital: Ethnographic Reflections on the New Economy*, pp.267-281. Durham, Duke University Press.
- De Boeck, Filip. 2005. Children and Witchcraft in the Democratic Republic of Congo. In Honwana, A. and F. De Boeck (eds.) *Makers and Breakers: Children and Youth in Postcolonial Africa*, London, James Currey.
- De Boeck, Filip. and Alcinda Honwana.(eds.) 2005. *Makers and Breakers: Children and Youth in Postcolonial Africa*. Trenton, Africa World Press
- Durham, Deborah. 2000. Youth and the Social Imagination in Africa: Introduction to Parts 1 and 2. *Anthropological Quarterly*, 73(3), 113-120.
- Durham, Deborah. 2004. Disappearing Youth: Youth as a Social Shifter in Botswana. *American Ethnologist*, 31(4): 589-605.

- Evans-Pritchard, E. E. 1940. *The Nuer: A Description of the Modes of Livelihood and Political Institutions of a Nilotic People*, Oxford, Clarendon Press.
- Hendrixson, Alcinda. 2004. *Angry Young Men, Veiled Young Women: Constructing a New Population Treat*. Corner House Briefing 34.
- Honwana, Alcinda. 1999. Negotiating Post-War Identities: Child Soldiers in Mozambique and Angola. *Codesria Bulletin* (1/2):4-13.
- Honwana, Alcinda. 2006. *Child Soldiers in Africa*, Philadelphia, University of Pennsylvania Press.
- Kurimoto, Eisei. and Simon. Simonse (eds.) 1998. *Conflict, Age and Power in North East Africa: Age Systems in Transition*, Nairobi, East African Educational Publishing.
- O'Brien, Cruise. D. 1996. A Lost Generation? Youth Identity and State Decay in West Africa. In R. Werbner (ed.) *Postcolonial Identities in Africa*, London, Zed Books.
- Rasmussen, Susan. J. 2010. The Slippery Sign: Cultural Constructions of Youth and Youthful Constructions of Culture in Tuareg Men's Face-Veiling. *Journal of Anthropological Research*, 463-484.
- Richards, Audrey. 1956. *Chisungu: A Girl's Initiation Ceremony among the Bemba of Zambia*. Abingdon, Routledge.
- Silverstain, Michael. 1976. Shifters, Linguistic Categories, and Cultural Description. In Basso, K. and H. Selby (eds.) *Meaning in Anthropology*, pp.11-56, Albuquerque, University of New Mexico Press.
- Sommers, Marc. 2010. Urban Youth in Africa. *Environment and Urbanization*, 22(2):317-332.
- Spencer, Paul. 1965. *The Samburu: A Study of Gerontocracy*. Abingdon, Routledge.
- United Nations, 2013. Definition of Youth. (<http://www.un.org/esa/socdev/documents/youth/factsheets/youth-definition.pdf>) (2018年1月25日最終閲覧)
- United Nations, 2015. Youth Population Trends and Sustainable Development, Development of Economic and Social Affairs Population Division. ([http://www.un.org/en/development/desa/population/publications/pdf/popfacts/PopFacts\\_2015-1.pdf](http://www.un.org/en/development/desa/population/publications/pdf/popfacts/PopFacts_2015-1.pdf)) (2017年11月25日最終閲覧)
- Wohl, Robert. 1979. *The Generation of 1914*. Cambridge, Harvard University Press.